日本体育大学紀要（Bull. of Nippon Sport Sci. Univ.），47 (1)，35–44，2017

【原著論文】

大学生における異性交際の経験年齢に関する規範意識

若尾　良徳

日本体育大学保育学研究室

The awareness of timing of romantic love behaviors among university students

Yoshinori WAKAO

Abstract: This study investigated age norm about romantic love behaviors, which is the awareness of timing of the first experience of romantic love behaviors. The age norm was divided into lower limit and upper limit: the lower limit means the acceptable age to initiate romantic love behaviors, and the upper limit means up to what age person is expected to experience romantic love behaviors. 349 university students replied to the questionnaire about approval and recognition of age norm, and the expected age. In result, many of them did not approve the age norm, but they recognized the existence of age norm about romantic love behaviors. The order of expected age was similar to that of "developmental stages in romantic love" (Matsui, 1990, 2000). In lower limit of age norm, there are more male than female who approved the lower limit of age norm, while in the upper limit, it was a reverse result. I discussed the influences of age norm toward the people who have no experiences of romantic love behaviors.

(Received: May 9, 2017 Accepted: August 10, 2017)

Key words: romantic behaviors, age norm, university students, life course, timing of the first experience
キーワード：異性交際，年齢規範，大学生，ライフコース，経験年齢

問　題

若者の異性交際開始年齢の変化

異性との交際は，青年期から成人初期の発達課題とされている。Erikson（1973）は，初期成人期の心理社会的危機を「親密性 対 孤立」としており，この時期に異性との性愛も含めた愛情関係を作り上げていくことが課題となるとしている。また，Havighurst（1958）は，青年期の発達課題のひとつとして，「同年齢の男女としての洗練された新しい交際を学ぶこと」を含めている。

しかし，近年，日本の若者において，人生の中で異性交際を開始する時期が大きく変化している。現代の若者の異性交際は，開始する年齢が早まる一方で，終結する年齢が遅くなっている。たとえば，中学生のデート経験率は，1987 年には 10％台であったが，2005 年には 20％台に，高校生のキス経験率は，1990 年代前半まで 20％台であったが，2005 年には 50％程度に上昇している（日本性教育協会，2007）。ただし，2011 年の調査以降には，異性交際の経験率は低下傾向にある。（日本性教育協会，2012）。一方で，異性交際のひとつの終結点としての結婚については，一貫して遅延化している。平均初婚年齢は，1985 年に男性 28.2 歳，女性 25.5 歳であったが，2000 年には男性 28.8 歳，女性 27.0 歳，2010 年には男性 30.5 歳，女性 29.8 歳，2015 年には男性 31.1 歳，女性 29.4 歳と，年々遅くなっている（厚生労働省人口動態統計）。

異性交際の開始年齢と終結年齢の変化は，異性交際のライフコースの変化ということができる。1980 年代以前は，異性交際の開始年齢は遅かったが，結婚年齢は早かったため，結婚以前に異性交際を行っている期間は現在に比べて短かった。また，見合い結婚の割合も高く（1982 年 29.4％，1987 年 23.3％；国立社会保障・人口問題研究所，2011），異性交際をほとんど経験しないで結婚する者も少なからず存在していた。すなわち，1980 年代以前には，生涯における異性交際経験は，青年期後期から成人期初期の短い期間に限れていたといえる。現在では，異性交際の開始年齢が早期化

した一方で初婚年齢は遅延化したため，生涯において異性交際を行う期間が延長している。高校生で異性交際を開始し，30 歳前後で結婚するという平均的な異性交際経験を想定すると，およそ 15 年間の異性交際期間がある。さらに，現在では 90％以上が恋愛結婚であり（国立社会保障・人口問題研究所，2011），結婚するためには恋愛しなければならない状況となっている。すなわち，現在では青年期前半から成人期にかけて 15 年という長きに渡って，異性交際を経験することが期待される期間があるということができる。

異性交際の開始時期の問題

異性交際を経験する期間は延長したが，生涯のいつの時期であっても，異性交際の経験が容認されるわけではない。早すぎる異性交際は容認されておらず，中学生の過半数が性行為を容認していない（木原, 2006）。一方で，一定の年齢を超えて異性交際の経験がないことも問題とされる。渋谷（2003）によると，男性は20歳までに性交を経験すべきという「童貞喪失年齢の規範化」の言説がみられている。すなわち，生涯の中で年齢的にどのタイミングで異性交際を経験するかについての規範的な考え方が存在していると考えられる。それでは，現代の若者は，生涯において異性交際を開始する時期についてどのように考えているのであろうか。

ライフイベントの生起タイミングの規範

ライフイベントの年齢的なタイミングや順序は，ライフコース研究の課題のひとつとして古くから検討されている（Neugarten, Moore, & Lowe, 1965；Settersten & Hagestad, 1996a, Elder & Shanahan, 2007）。Neugarten ら（1965）によると，人は家族や職業についてのイベントに関して自分自身が“早い”とか“遅い”とか“時間どおり”であるというように記述する。このようなライフイベントの生起タイミングの基準となる年齢に関する意識は，年齢規範（age norm）として概念化されている（Neugarten et al., 1965）。年齢規範とは，ある発達課題を経験することが期待される年齢と，その年齢から逸脱した者にネガティブな結末が生じるという予期とが集団の成員に共有されていることを指す（Neugarten et al., 1965；Settersten & Hagestad, 1996a）。年齢規範は，成人の生活の文化的構造に埋め込まれており，主なライフイベントに規範的なタイムテーブルと呼ばれるものが存在するとされる（Neugarten et al., 1965）。年齢規範に関するこれまでの研究においては，主に就職や昇進などの職業生活（Lawrence, 1996；Lashbrook, 1996；Settersten & Hagestad, 1996a），自立や結婚，子育てなどの家族生活が取りあげられてきた（Settersten & Hagestad, 1996b）。日本においては，高校生や大学生を対象に職業生活に関する年齢規範が検討されてきた（望月・中島・大根田，1992；大根田・望月・中島，2003）。しかし，これまでの年齢規範に関する研究は，成人期に注目しており，青年期についてはあまり取り上げられてこなかった（Meier, 2007）。生涯において異性交際を経験することが期待される期間が延長し，恋愛が結婚の前提となっており，異性交際は重要なライフイベントであるといえる。そこで，本研究では，現代の若者における異性交際の開始年齢についての規範意識に注目する。

異性交際を経験すべき年齢に関する研究

異性交際の開始年齢について意識に関する研究として，Rosenthal & Smith（1997）によるオーストラリアの 15 ～ 16 歳の若者を対象にした調査では，性的行動を開始するのにふさわしい年齢として，キスについては 12 ～ 14 歳，身体を触るから性交までの行動は 15 ～ 17 歳がふさわしいとされている。また，若尾・天野（2007）は，日本の大学生を対象に，初めての性交をするのに望ましい年齢について，その年齢から経験するのが望ましいという年齢（以下，下限年齢）と，その年齢までに経験するのが望ましいという年齢（以下，上限年齢）をそれぞれ調査している。その結果，下限年齢については，15 歳から 18 歳の範囲に回答の 90％が集中し，上限年齢については，18 歳から 20 歳の範囲に男性については回答の 70％が，女性については回答の 60％が集中していた。すなわち，性交を経験するのに望ましい年齢が，特定の年齢範囲に集中する傾向がみられている。

しかし，これらの研究は，主に性的行動にのみに注目しており，それ以外の異性交際行動を取りあげていない。松井（1990, 2000）の恋愛段階モデルによると，異性交際行動の種類には，「手や腕を組む」「キス・抱き合う」「ペッティング」「性交」といった性的行動と，「デート」「恋人としてつき合う」「結婚」といった異性交際行動などが挙げられている。本研究では，異性交際の発達を検討するにあたり，異性交際行動として，「異性とデートをした経験」，「（恋愛対象として）異性と手をつないだり腕を組んだ経験」，「異性とキスをした経験」，「異性と抱きあった経験」，「異性と恋人としてつき合った経験」，「異性とペッティング（挿入を行わない性行為）をした経験」，「異性と性交（セックス）した経験」，「結婚した経験」の 8 つの行動を取りあげる。

年齢規範の分類

これまでのライフイベントの年齢的なタイミングに

関する研究では，あるライフイベントを開始してよい年齢と，それまでに経験しておかないといけない年齢のどちらか一方だけが扱われることが多かった。しかし，前述のように異性交際に関しては，何歳から開始して良いのか，何歳までに経験しておくべきなのかのどちらも問題とされている。そこで，本研究では，若尾・天野（2007）と同様に，その年齢から経験しても良い年齢（下限年齢）と，その年齢までに経験しておかないといけない年齢（上限年齢）の両方について取り上げる。

また，年齢規範は，「個人の規範として受け入れているレベル」と，「個人の規範として受けいれていなくてもそのような規範があることを認識しているレベル」を想定することができる。自らの規範として受け入れていなくても，規範の存在を認識することが個人の異性交際行動に影響する可能性があるからである。たとえば，若者の異性交際行動は，同年代の仲間が異性交際をどのように評価しているかによっても影響されることが示されている（Lewis & Lewis, 1984；Thompson, 1982）。そこで，本研究においては，年齢規範を自らの規範として承認しているレベルと，自分はどう思うかはともかく社会ではそう言われているはずだというように年齢規範の存在を認識しているレベルで捉え，前者を年齢規範の承認，後者を年齢規範の認識とする。

年齢規範の性差

年齢規範の承認や認識には性差が予想される。伝統的には，女性には貞操が望まれるのに対して，男性には性的な経験の豊富さが期待され，女性が早くから異性交際をすることが望ましくないと考えられている（川村，1996）。また，性に対する寛容さは，女性よりも男性の方が高い（和田，2004）。このように性別によって性行動に対する評価基準が異なることを性の二重基準という。性の二重基準の点から，女性は早くから異性交際を経験することが望ましくないため，下限年齢の承認率，認識率は女性の方が男性より高く，基準年齢についても女性の方が高いと考えられる。一方，男性は豊富な経験が望まれ，経験がないことが望ましくないとされるため，上限年齢の承認率，認識率は，女性より男性の方が高く，基準年齢については男性の方が低いと考えられる。一方で，生物学的な観点からみれば，異性交際は自らの遺伝子を残すこと，つまり生殖を目的とする。生殖可能な年齢には性差があり，一般に女性の方が早くに性的成熟をするが，生殖ができなくなる年齢（閉経）も早い。先行研究においては，一般に年齢規範は，領域にかかわらず全体的に女性より男性について知覚されているが，生物学的な制約を受ける「子育てを終えること」の期限は，男性より女性について言及されている（Settersten & Hagestad, 1996a, 1996b；Settersten, 2003）。したがって，上限年齢の承認率，認識率は，男性よりも女性の方が高く，基準となる年齢については男性より女性の方が低い可能性も考えられる。

本研究の目的

本研究は，若者の異性交際が早期化，活発化した2000年代後半において，若者が異性交際を経験する年齢的タイミングについての年齢規範をどの程度承認，および認識しているのか，また基準となる年齢，およびその順序はどうなっているのか，さらに調査協力者の性別による差はみられるのか，について検討することを目的とする。

方　法

調査協力者

東京都および静岡県の私立大学の大学生349名（男性224名，女性115名，不明10名）に質問紙調査への回答を求めた。回答者の平均年齢は19.52歳（SD=0.99）であった。

調査手続き

2008年5月に大学の授業中に質問紙を配布し，その場で回答を求め，回収した。

質問項目

本研究では，異性交際行動として，松井（1990, 2006）の恋愛行動の進展段階のうち，性的行動として挙げられている「手や腕を組む」「キス」「抱き合う」「ペッティング」「性交」に加えて，異性交際行動に特徴的な，「デート」「恋人としてつき合う」「結婚」を加えた。すなわち，異性交際行動として，①「異性とデートをした経験」（以下，「デート」），②「（恋愛対象として）異性と手をつないだり腕を組んだ経験」（以下，「手や腕」），③「異性とキスをした経験」（以下，「キス」），④「異性と抱きあった経験」（以下，「抱きあう」），⑤「異性と恋人としてつき合った経験」（以下，「恋人」），⑥「異性とペッティング（挿入を行わない性行為）をした経験」（以下，「ペッティング」），⑦「異性と性交（セックス）した経験」（以下，「セックス」），⑧「結婚した経験」（以下，「結婚」）の8つの行動を取り上げた。

年齢規範の質問項目は，望月ら（1992）が職業生活の年齢規範を測定する際に用いた質問項目を参考に作成した。年齢規範の上限年齢は「いつまでも経験がないとよくない年齢」とし，下限年齢は「あまりに若い年齢で経験するのはよくない年齢」とした。

(1) 年齢規範の承認

上限年齢については，「いつまでも“○○した経験”がないのは，よくない」という記述に対して，下限年齢については，「あまりに若い年齢で“○○する”のは，よくない」という記述に対してそれぞれ回答を求めた。○○には，前述の 8 つの異性交際行動を提示し，上限年齢 8 項目，下限年齢 8 項目の計 16 項目である。いずれの回答も同性を想定して回答するよう求めた。回答は，4 段階で，「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」という回答を「承認」とし，「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」という回答を「非承認」として集計した。

(2) 年齢規範の認識と基準年齢

上限年齢については，各行動について「いつまでも“○○した経験”がないのは，よくない」と言われ始める年齢があるかどうか，またそれが何歳くらいかをたずねた。下限年齢については，各行動について「そんなに若い年齢で“○○する”のは，よくない」と言われる年齢があるかどうか，またそれが何歳くらいかをたずねた。○○には，前述の 8 つの異性交際行動を提示し，上限年齢 8 項目，下限年齢 8 項目の計 16 項目である。回答は，「1. およそ（　）歳からである」「2. はっきり言いにくいが，（　）歳くらいからだろう」「3. まったく見当がつかない」から 1 つを選択してもらい，1 または 2 の場合は，年齢を記入してもらった。いずれの回答も同性を想定して回答するよう求めた。年齢規範の認識については，1 および 2 の回答を「認識」とし，3 の回答を「無認識」として分析した。また，回答された年齢を基準年齢とした。

(3) 回答者自身の経験

8 つの異性交際行動について，回答者自身の経験の有無をたずねた。また，経験があると答えた異性交際行動については，その経験を初めて行った年齢を回答してもらった。

分析手法

統計的分析においては，SPSS Statistics Ver. 21 を用いた。

倫理的配慮

本研究は，異性交際行動の経験や意識をたずねる項目を含んでいるため，倫理的な配慮が必要となる。そこで，調査の実施に際して，次のような配慮を行った。まず，調査用紙の配布に先立ち，調査協力者には，試験と同様に座席をひとつおきに座ってもらい，他の人の回答を絶対に見ないように注意をした。また，回答は答えられる範囲でかまわないし，回答したくない人は白紙で提出してもかまわないという説明をした。さらに，調査用紙と一緒に口糊付封筒を配布し，回答済みの調査用紙は封筒に入れて封をして提出してもらった。調査は匿名で行い，調査用紙や封筒には氏名や学籍番号など個人が特定できる情報を記入しないように伝えた。提出に際しては，回収箱を設置して，調査協力者に自らの手で回収箱に入れてもらい，調査者が直接受け取ることのないようにした。

結　果

回答者の異性交際経験率

回答者の異性交際経験率を Table 1 に示した。デート経験率（男性 80.4%，女性 80.9%），キス経験率（男性 66.1%，女性 71.3%）は，同時期に行われた先行研究と同程度であった（日本性教育協会，2007；デート経験率，男性 79.0%，女性 81.5%，キス経験率，男性 72.3%，女性 72.2%）。セックス経験率（男性 54.0%，女性 48.7%）については，先行研究（男性 61.3%，女性 61.1%）より低かった（日本性教育協会, 2007）。本研究の回答者は，大学 1，2 年生が多く，年齢が低いためであると考えられる。また，大学生であり平均年齢が低いため，結婚を経験している回答者はほとんどいなかった。

年齢規範の承認率

男女別の年齢規範の承認率，およびその性差の検定結果を Table 2 に示した。

下限年齢については，男女とも段階の進んだ行動ほど承認率が高い傾向にあった。男性では，ペッティングは 42.9%，セックスは 53.4%，結婚は 59.4%の承認率であった。女性では，ペッティングは 68.4%，セッ

Table 1　調査協力者の異性交際行動の経験率（%）

		デート	手や腕	キス	抱きあう	恋人	ペッティング	セックス	結婚
男性	無し	13.4	18.3	26.3	25.9	21.4	33.9	37.5	91.1
	有り	80.4	74.6	66.1	65.6	71.0	57.6	54.0	0.9
	無回答	6.3	7.1	7.6	8.5	7.6	8.5	8.5	8.0
女性	無し	12.2	17.4	20.0	21.7	18.3	34.8	41.7	92.2
	有り	80.9	73.9	71.3	69.6	73.0	54.8	48.7	0.0
	無回答	7.0	8.7	8.7	8.7	8.7	10.4	9.6	7.8

Table 2　異性交際行動の年齢規範についての男女別の承認率（%）と χ^2 検定の結果

	男性	女性	χ^2値
下限承認率			
デート	7.1	9.6	.61 *ns.*
手や腕	6.3	7.8	.30 *ns.*
キス	12.9	22.6	5.22 *
抱きあう	18.8	21.7	.43 *ns.*
恋人	15.6	20.0	1.03 *ns.*
ペッティング	42.9	68.4	19.77 ***
セックス	53.4	78.9	20.96 ***
結婚	59.4	64.3	.79 *ns.*
上限承認率			
デート	54.9	40.0	6.76 **
手や腕	50.0	34.8	7.11 **
キス	47.3	29.6	9.88 **
抱きあう	45.5	30.4	7.20 **
恋人	52.2	39.5	4.93 *
ペッティング	43.0	20.9	16.30 ***
セックス	44.2	25.2	11.65 ***
結婚	30.5	22.6	2.35 *ns.*

注.　数値は百分率（%）
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

Table 3　異性交際行動の年齢規範についての男女別の認識率（%）と χ^2 検定の結果

	男性	女性	χ^2値
下限認識率			
デート	63.1	69.3	1.25 *ns.*
手や腕	54.6	59.6	.76 *ns.*
キス	61.3	68.4	1.64 *ns.*
抱きあう	64.8	66.7	.11 *ns.*
恋人	60.4	69.3	2.57 *ns.*
ペッティング	79.3	84.2	1.19 *ns.*
セックス	83.9	83.3	.02 *ns.*
結婚	78.4	85.8	2.65 *ns.*
上限認識率			
デート	78.9	83.2	.87 *ns.*
手や腕	74.2	77.7	.48 *ns.*
キス	74.2	76.8	.27 *ns.*
抱きあう	73.7	75.0	.06 *ns.*
恋人	77.0	80.4	.50 *ns.*
ペッティング	71.9	63.4	2.49 *ns.*
セックス	72.8	66.1	1.61 *ns.*
結婚	66.8	70.5	.47 *ns.*

注.　数値は百分率（%）

クスは 78.9%, 結婚は 64.3%の承認率であった。キス，ペッティング，セックスにおいて性差がみられ，いずれも男性より女性において承認率が高かった。一方，デートから恋人としてつきあうまでの行動については，男女とも承認率は非常に低く，性差もみられなかった。

上限年齢については，男性では，デートは 54.9%，手や腕は 50.0%，キスは 47.3%，抱きあうは 45.5%，恋人は 52.2%，ペッティングは 43.0%，セックスは 44.2%であり, 結婚（30.5%）以外は承認率は半数程度であった。女性では, デートは 40.0%, 手や腕は 34.8%，キスは 29.6%，抱きあうは 30.4%，恋人は 39.5%，ペッティングは 20.9%，セックスは 25.2%，結婚 22.6%と半数に満たない低い承認率であった。結婚を除いたすべての行動において性差がみられ，いずれも女性より男性において承認率が高かった。

年齢規範の認識率

男女別の年齢規範の認識率，およびその性差の検定結果を Table 3 に示した。

下限年齢については，男女とも手や腕は 50%台（男性 54.6%，女性 59.6%），デート（男性 63.1%，女性 69.3%），キス（男性 61.3%，女性 68.4%），抱きあう（男性 64.8%，女性 66.7%），恋人（男性 60.4%，女性 69.3%）については 60%台, ペッティング（男性 79.3%，女性 84.2%），セックス（男性 83.9%，女性 83.3%），結婚（男性 78.4%，女性 85.8%）については 80%程度が，早くに経験するのは良くないと言われる年齢があると認識していた。いずれの行動についても性差はみられなかった。

上限年齢については，男性の結婚および女性のペッティング，女性のセックスを除けば, 70 ～ 80%程度がいつまでも経験がないのは良くないと言われる年齢があると認識していた。男性の結婚（66.8%）および女性のペッティング（63.4%）, 女性のセックス（66.1%）については，認識率はやや低く，60%台であった。いずれの行動についても性差はみられなかった。

基準年齢の平均と分布

基準年齢の男女別の平均値と標準偏差を Table 4 に示した。

下限の基準年齢は，デートから恋人までの行動については，12，13 歳より若いと，早すぎると考えられていた。ペッティング，セックスの性的な行動については，およそ 15 歳が基準となっていた。結婚については，男性では 19.1 歳，女性では 18.3 歳が基準となっていた。下限の基準年齢に，異性交際行動の種類によって異なるか，また性差がみられるかを調べるために，異性交際行動の種類（8：被験者内）×性別（2：被験者間）の混合要因の分散分析を行った。その結果，異性交際行動の種類の主効果がみられた（$F(3.3,\ 520.7)=262.44$, $p<.001$）。多重比較の結果，デートと手や腕の

Table 4　基準年齢の男女別の平均値と標準偏差およびLeveneの等分散性検定の結果

	男性		女性		Leveneの等分散性検定
	M	*SD*	*M*	*SD*	*F* 値
下限年齢					
デート	11.9	3.3	11.9	2.0	4.79 *
手や腕	11.9	3.2	11.8	2.2	1.43
キス	12.7	3.2	12.8	1.9	5.05 *
抱きあう	13.3	3.1	13.5	2.3	2.56
恋人	12.6	3.0	12.7	2.3	.64
ペッティング	14.7	2.5	15.0	2.3	.31
セックス	15.1	2.5	15.4	2.5	.25
結婚	19.1	2.7	18.3	2.5	1.06
上限年齢					
デート	21.4	8.1	22.0	4.3	1.85
手や腕	21.4	8.3	21.1	4.0	3.66 †
キス	22.3	8.4	22.2	4.3	3.89 *
抱きあう	22.5	8.8	22.6	4.3	3.94 **
恋人	22.5	8.3	23.1	4.9	2.68
ペッティング	23.0	8.0	24.3	4.5	2.00
セックス	23.5	8.1	25.0	4.5	4.15 **
結婚	36.7	9.7	35.3	5.2	4.86 **

注. ** p <.01, * p <.05, † p <.10

間以外のすべての行動間に有意な差がみられ，デート，手や腕＜キス＜恋人＜抱きあう＜ペッティング＜セックス＜結婚の順で下限年齢が高くなっていた。性差および交互作用効果はみられなかった。

また，下限の基準年齢は男女で分散が大きく異なっているため，Leveneの等分散性検定により，分散に統計的に有意な差があるか調べた。その結果，デートとキスについて分散に性差がみられ，女性の方が男性より分散が小さかった。

下限の基準年齢の回答の分布および累積割合を，結婚以外をTable 5，結婚をTable 6に示した。男女とも，デートから恋人までの行動は12歳，ペッティング，セックスは15歳，結婚は18歳という回答が最も多かった。また，80%以上が若すぎると言われると回答した年齢に注目すると，デート，手や腕，恋人としてつきあうについては10歳以下，キスと抱きあうについては12歳以下，ペッティングについては13歳以下，セックスについては，男性は13歳以下，女性は14歳以下で経験すると若すぎると言われると認識されるという結果が得られた。

平均的には，男女とも結婚以外の行動は21歳から25歳までの20代前半が，結婚については30歳台半ばが基準となっていた（Table 4）。上限の基準年齢が，異性交際行動の種類によって異なるか，また性差がみられるかを調べるために，異性交際行動の種類（8：被験者内）×性別（2：被験者間）の混合要因の分散分析を行った。その結果，異性交際行動の種類の主効果がみられた（F(2.5, 439.4)=450.2, p<.001）。多重比較の結果，デートと手や腕の間，およびキスと恋人の間以外の行動間に有意な差がみられ，デート，手や腕＜キス，恋人＜抱きあう＜ペッティング＜セックス＜結婚の順で上限年齢が高くなっていた。性差および交互作用効果はみられなかった。

男女で分散が大きく異なるため，Leveneの等分散性検定により，分散に統計的に有意な差があるか調べた。その結果，キス，抱きあう，セックス，結婚については，分散に有意な差がみられ，女性の方が男性より分散が小さかった。

上限の基準年齢の回答の分布および累積割合を，結婚以外をTable 7，結婚をTable 8に示した。男性については，すべての行動で20歳という回答が最も多かった。また，デートから抱きあうまでの行動で，18歳という回答も多くみられた。女性については，すべての行動で，20歳と25歳に回答が集中していた。また，ペッティングとセックスで30歳という回答が多かっ

Table 5　下限の基準年齢の分布（結婚を除く）（%）

	デート		手や腕		キス		抱きあう		恋人		ペッティング		セックス	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
19歳以上	1.5	1.3	0.8	0.0	2.3	1.3	2.9	2.6	3.1	2.5	4.1	3.1	3.8	6.3
18歳	2.2	1.3	1.7	2.9	2.3	2.6	2.9	5.3	0.8	2.5	6.4	12.5	9.9	10.5
17歳	1.5	0.0	0.8	0.0	1.5	1.3	5.8	0.0	0.8	0.0	4.1	1.0	8.2	7.4
16歳	2.2	0.0	5.1	0.0	3.8	2.6	3.6	3.9	3.8	2.5	11.7	13.5	12.6	16.8
15歳	10.2	7.6	11.9	8.8	15.8	10.3	20.9	21.1	13.7	15.2	36.8	36.5	34.1	31.6
14歳	5.8	6.3	2.5	5.9	10.5	10.3	12.9	11.8	9.2	6.3	13.5	10.4	11.0	**8.4**
13歳	7.3	13.9	8.5	13.2	9.8	11.5	6.5	7.9	13.0	8.9	**4.1**	**8.3**	**4.4**	6.3
12歳	38.0	36.7	33.9	33.8	**35.3**	**46.2**	**29.5**	**38.2**	32.1	36.7	12.9	11.5	10.4	10.5
11歳	5.1	2.5	5.1	4.4	1.5	3.8	0.0	1.3	3.1	3.8	1.8	0.0	2.2	0.0
10歳	**16.1**	**26.6**	**22.0**	**20.6**	10.5	9.0	10.1	7.9	**15.3**	**20.3**	3.5	3.1	2.7	2.1
9歳以下	10.2	3.8	7.6	10.3	6.8	1.3	5.0	0.0	5.3	1.3	1.2	0.0	0.5	0.0

注. 太字は累積割合が80%を超えたポイントであることを示している。

Table 6　下限の基準年齢の分布（結婚）（%）

	男性	女性
30歳	0.6	0.0
25歳	4.7	3.1
24歳	1.8	1.0
23歳	2.9	1.0
22歳	9.4	5.2
21歳	2.3	1.0
20歳	21.1	19.6
19歳	6.4	6.2
18歳	*32.7*	25.8
17歳	4.1	14.4
16歳	6.4	*17.5*
15歳以下	7.7	5.2

注. 下線斜体は累積割合が80%を超えたポイントであることを示している。

た。また，経験がないと良くないと言われると 80%以上が回答した年齢に注目すると，男性においてはデートからペッティングまでは 25 歳以上で，セックスは 30 歳以上で，経験がないと良くないと言われると認識されるという結果が得られた。女性については，デートから恋人までは 25 歳以上で，ペッティングとセックスについては 30 歳で未経験だと良くないと言われると認識されていた。結婚については，30 歳，35 歳，40 歳の 3 つの年齢に回答が集中しており，40 歳で未経験だと良くないと言われると認識されるという結果が得られた。

異性交際経験が許容されると認識されている範囲を Figure 1 に示した。白抜きの範囲が，80%以上が認識している基準年齢であり，網掛け部分は基準年齢の平

Table 8　上限の基準年齢の分布（結婚）（%）

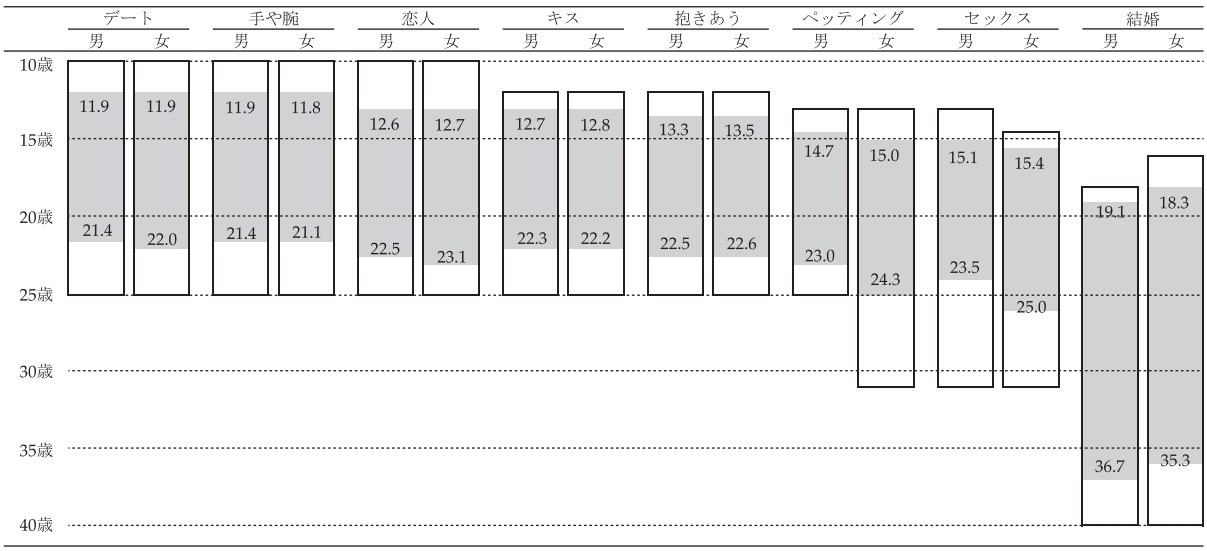
	男性	女性
29歳以下	4.9	7.4
30歳	27.6	21.2
31歳	0.0	0.0
32歳	1.4	1.2
33歳	0.0	2.5
34歳	0.7	0.0
35歳	20.0	30.0
36歳	2.1	2.5
37歳	0.0	1.2
38歳	1.4	1.2
39歳	0.7	0.0
40歳	**31.0**	**26.2**
41歳以上	10.3	6.2

注. 太字は累積割合が80%を超えたポイントであることを示している。

Table 7　上限の基準年齢の分布（結婚を除く）（%）

	デート				手や腕				キス				抱きあう				恋人				ペッティング				セックス			
	男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性		女性		男性		女性	
	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積	割合	累積
17歳以下	16.3	16.3	9.6	9.6	16.8	16.8	10.3	10.3	13.0	13.0	8.1	8.1	11.3	11.3	6.0	6.0	12.6	12.6	7.8	7.8	5.8	5.8	1.4	1.4	3.8	3.8	1.4	1.4
18歳	25.0	41.3	12.8	22.3	24.2	41.0	21.8	32.2	20.5	33.5	10.5	18.6	20.6	31.9	10.7	16.7	18.6	31.1	8.9	16.7	14.1	19.9	2.8	4.2	14.6	18.4	1.4	2.7
19歳	4.1	45.3	1.1	23.4	4.3	45.3	1.1	33.3	3.7	37.3	3.5	22.1	3.8	35.6	3.6	20.2	3.6	34.7	2.2	18.9	3.2	23.1	4.2	8.5	3.2	21.5	4.1	6.8
20歳	27.9	73.3	34.0	57.4	28.0	73.3	29.9	63.2	30.4	67.7	33.7	55.8	30.6	66.3	31.0	51.2	28.1	62.9	30.0	48.9	35.3	58.3	26.8	35.2	33.5	55.1	20.3	27.0
21歳	0.0	73.3	1.1	58.5	0.0	73.3	1.1	64.4	0.0	67.7	0.0	55.8	0.0	66.3	0.0	51.2	0.0	62.9	0.0	48.9	0.0	58.3	0.0	35.2	0.0	55.1	1.4	28.4
22歳	2.3	75.6	2.1	60.6	3.1	76.4	3.4	67.8	1.9	69.6	0.0	55.8	1.9	68.1	0.0	51.2	3.0	65.9	1.1	50.0	5.8	64.1	2.8	38.0	5.1	60.1	2.7	31.1
23歳	1.2	76.7	1.1	61.7	1.2	77.6	3.4	71.3	1.2	70.8	3.5	59.3	1.3	69.4	7.1	58.3	1.2	67.1	3.3	53.3	1.3	65.4	5.6	43.7	1.3	61.4	5.4	36.5
24歳	0.6	77.3	0.0	61.7	0.6	78.3	0.0	71.3	1.2	72.0	1.2	60.5	1.3	70.6	0.0	58.3	1.2	68.3	2.2	55.6	0.6	66.0	1.4	45.1	0.0	61.4	4.1	40.5
25歳	*8.7*	*86.0*	*23.4*	*85.1*	*6.8*	*85.1*	*19.5*	*90.8*	*9.9*	*82.0*	*27.9*	*88.4*	*13.1*	*83.8*	*28.6*	*86.9*	*13.2*	*81.4*	*24.4*	*80.0*	*14.7*	*80.8*	28.2	73.2	15.2	76.6	25.7	66.2
26歳	0.6	86.6	0.0	85.1	0.0	85.1	0.0	90.8	1.2	83.2	1.2	89.5	0.6	84.4	1.2	88.1	0.0	81.4	1.1	81.1	0.0	80.8	0.0	73.2	0.6	77.2	0.0	66.2
27歳	0.6	87.2	1.1	86.2	0.6	85.7	1.1	92.0	0.0	83.2	0.0	89.5	0.6	85.0	0.0	88.1	0.0	81.4	0.0	81.1	0.0	80.8	1.4	74.6	0.0	77.2	2.7	68.9
28歳	0.0	87.2	3.2	89.4	0.6	86.3	0.0	92.0	0.6	83.9	1.2	90.7	0.6	85.6	0.0	88.1	1.8	83.2	2.2	83.3	0.6	81.4	1.4	76.1	0.0	77.2	4.1	73.0
29歳	0.0	87.2	0.0	89.4	0.0	86.3	0.0	92.0	0.0	83.9	0.0	90.7	0.0	85.6	0.0	88.1	0.0	83.2	0.0	83.3	0.0	81.4	1.4	77.5	0.0	77.2	1.4	74.3
30歳	8.7	95.9	10.6	100.0	9.3	95.7	8.0	100.0	11.8	95.7	8.1	98.8	9.4	95.0	10.7	98.8	10.2	93.4	14.4	97.8	15.4	96.8	*21.1*	*98.6*	*18.4*	*95.6*	*23.0*	*97.3*
31歳以上	4.1	100.0	0.0	100.0	4.3	100.0	0.0	100.0	4.3	100.0	1.2	100.0	5.0	100.0	1.2	100.0	6.6	100.0	2.2	100.0	3.2	100.0	1.4	100.0	4.4	100.0	2.7	100.0

注. 下線斜体は累積割合が80%を超えたポイントであることを示している。



注. □の範囲は80%以上が認識している基準年齢であり，■範囲は基準年齢の平均の範囲である。

Fig. 1　大学生が認識する異性交際の開始が許容される年齢範囲

均の範囲である。おおよその年齢範囲として，年齢範囲から，デート，手や腕の段階，恋人，キスの段階，抱きあうの段階，ペッティング，セックスの段階，結婚の段階に分かれているといえる。

考　察

本研究は，現代の若者が異性交際を経験する年齢に関する規範をどの程度承認，または認識しているのか，その基準となる年齢を何歳であると認識しているのか，さらにそれらに性差がみられるのかを検討した。その結果，大学生は，異性交際を開始すべき年齢や経験しておくべき年齢について，自らの規範として承認している割合は低いが，規範が存在しているという認識率は高かった。現代の若者においては，異性交際を経験する期間は長くなっているが，その年齢的なタイミングに関して，規範的な意識が存在していることが明らかになった。

異性交際開始の下限年齢は，小学生のうちはデートをして手をつなぐくらいまで，中学生になったら恋人としての交際，キスや抱きあうという身体接触が許容され，性的な行動は高校生になったら経験しても良いと認識されていた。この結果は，中学生の性交に否定的な意見が多いという調査結果や（東京都幼稚園･小･中･高･心障性教育研究会，2005），オーストラリアの若者の調査結果とも一致していた(Rosenthal & Smith, 1997)。現実に中学生の性交経験率は，中学 3 年生で男子 4.3%，女子 9.8%と低く（東京都幼稚園・小・中・高･心障性教育研究会，2005），現実を反映した基準となっているといえる。

一方，上限の基準年齢については，男女ともデートから恋人としてつきあうまでの行動は 25 歳まで，ペッティング，セックスについては 30 歳までに経験してないと良くないと評価されると認識されていた。また，結婚を除くと 31 歳以上という回答はほとんどみられず，20 歳代までに異性交際を経験しておくべきという規範があるという認識されている。また，男性については，20 歳に回答が集中し，特にセックスについておよそ 3 分の 1 が 20 歳と回答しており，性交未経験のまま 20 歳になった者をネガティブな意味合いで表する「ヤラハタ」言説がみられるように（渋谷，2003），20 歳がひとつの基準になっていることがうかがえる。しかし，現実の異性交際未経験者の割合をみると，20 代後半の未婚者において，交際経験がない者が男女とも約 3 割もいるという調査結果がある（内閣府政策統括官，2011）。また，30 代前半で性交未経験の者が，2005 年には男性で 11.4%，女性で 8.5%である。すなわち，認識されている基準年齢を超えても異性交際を未経験の者が少なからず存在している。現実の異性交際の開始年齢は多様化しているにも関わらず，異性交際のタイミングに関する規範の存在が高い割合で認識されている。

未経験の若者への影響

本研究において，「いつまでも経験しないのは良くない」という問いかけをしている背景には，年齢規範には，行動が期間外で生じたときに不適切という評価をすることを含んでいる（Neugarten et al., 1965）。つまり，異性交際の年齢規範が承認あるいは認識されているということは，若者において，一定年齢以下の異性交際経験者や一定年齢以上の異性交際未経験者は，ネ

ガティブな評価をされている，またはそのように捉えられているということである。実際に，一定年齢以上の異性交際未経験がネガティブな評価を受けていることが示されている。たとえば，若尾（2004，2013）は，大学生を対象とした調査から，大学生の年齢において異性と恋人としてつきあった経験やセックスの経験がない人は，経験がある人に比べて，人格的にネガティブな評価がなされることを明らかにしている。大学生を対象とした研究においても，性交未経験の若者が，性交未経験者へのネガティブな評価を認識することで，自尊心が低下し，抑うつが上昇することが明らかになっている（若尾･天野，2012）。本研究の調査協力者の多くが年齢規範を認識していたことから，異性交際未経験の者はネガティブな評価を受けてしまう懸念から悩みや不安を抱いてしまう可能性がある。とりわけ，近年，20 歳代後半や 30 歳代で異性交際未経験の者が増加している（国立社会保障・人口問題研究所，2017）。異性交際の年齢規範の存在が，異性交際の経験のない若者にとって，悩みや不安を抱く要因になりうると考えられる。

恋愛段階との対応

基準年齢を大まかな段階として分類すると，第 1 段階に，デートと手をつなぐ・腕を組む，第 2 段階に，キスと恋人としてつきあう，第 3 段階に，抱きあう，第 4 段階に，ペッティング，セックス，第 5 段階に結婚の順となる。松井（2000）の恋愛行動の段階においては，デート，手をつなぐ・腕を組むは第 2 段階，キス，抱き合うは第 3 段階，ペッティング，セックスは第 4 段階，結婚は第 5 段階に配置されているが，本研究で示された経験年齢に関する意識と比較すると，キスと抱き合うが段階に分かれた以外は順序としては一致していた。このことから，本研究の結果は，発達的な順序に関する意識の観点から，松井の恋愛段階モデルを検証できたと言えよう。

性差

男性は異性交際を早くから経験することは許されるが，いつまでも経験がないことも許容されていない。一方，女性は，異性交際を早くに経験することは許されないが，いつまでも経験していなくても許容される。このことから，異性交際が許容される年齢，異性交際を経験しておくべき年齢については，社会文化的な観点からの仮説が支持され，性の二重基準といえるような認識が存在していることが示された。しかし，現実の若者の異性交際経験率は女性の方が高く，30 代の未経験率は男性の方が高い。このことから，女性においては早期に異性交際を経験することによって，男性においてはある程度の年齢を超えて異性交際の経験がないことによって，社会からのネガティブな評価にさらされる傾向があるといえる。

年齢規範の年代的変化

松井（2012）は，性行動研究・恋愛研究には時代性の考慮も必要であると述べている。本研究の回答者は，2000 年代半ばに高校時代を過ごしたコホートであり，異性交際行動を早期に活発に経験している。このコホートの活発な異性交際行動の背景には，本研究で示されたように異性交際の年齢規範が多くの若者に認識されていたことが影響していることが考えられる。ところが，2000 年代後半以降は，異性交際は遅延化，不活発化の傾向にあり，その傾向は現在も続いている（日本性教育協会，2012，国立社会保障･人口問題研究所，2017）。その要因の 1 つに，異性交際の年齢規範の変化が影響している可能性がある。

本研究の展望

本研究は，異性交際の早期化，活発化の背景の 1 つとして，異性交際の年齢規範の存在を検討し，大学生を対象とした調査から，異性交際の年齢規範を自らの規範として承認している割合は低いが，規範が存在しているという認識率は高いことを明らかにした。また，異性交際の経験が許容されると考えられている年齢範囲を示した。今後の展望としては，異性交際が遅延化，不活発化しているなかで，異性交際の年齢規範がどのように変化しているのかを調べていく必要がある。また，異性交際の年齢規範を承認，認識していることで，その後の異性交際のあり方に何らかの影響があるのか，特に異性交際行動の抑制効果や促進効果があるのかを，縦断的な調査を行うことで明らかにしていく必要があろう。さらに，異性交際期間をライフコースのなかに位置づけるために，現在の若者が，実際にどのような異性交際の軌跡をたどっているのか，そこにはどのようなパターンがあるのか，どのような意味づけを行っているのか，調べていく必要がある。たとえば，異性交際の標準的なライフコースに比べて早くに異性交際を開始することや，逆に遅くに開始することは，どのような発達的な結果をもたらすのかは興味深い問題である。本研究は大学生を対象としていたが，異性交際を開始する前の中学生や，上限年齢を過ぎている 20 歳代後半や 30 歳代では，年齢規範に関する意識がどのように異なるかという点も興味深い。現在，晩婚化，未婚化，さらには異性交際の未経験化が問題となっているが，そのような若者の異性交際に関する意識と，異性交際のライフコースの軌跡を調べていくことで，問題を発達的な観点から理解していくことができよう。

文　献

新井周作・森下　覚・岡部大介・有元典文.（2004）文化的なオブジェクトとしての「童貞」. *横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター紀要*, ***4***, 67–88.

Elder, G. H., Jr., & Shanahan, M. J. (2006). The life course and human development. In R. M. Lerner & W. Damon & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol.1. Theoretical models of human development* (6th ed., pp. 665–715). Hoboken, NJ: John Wiley.

Erikson, E. H. (1973). *自我同一性－アイデンティティとライフサイクル*（小此木啓吾，訳）. 東京：誠信書房. (Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle. Psychological Ieesues Monograh, Vol. 1, No. 1.* New York : International Universities Press.)

Havighurst, R. J. (1958). *人間の発達と教育*（荘司雅子，訳）. 東京：牧書店. (Havighurst, R. J. (1953). *Human development and education*. New York: Longmans Green.)

川村邦光.（1996）. 処女の近代―封印された肉体. 井上　俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉（編）, *セクシュアリティの社会学*（pp. 131–147）. 東京：岩波書店.

木原雅子.（2006）. *10 代の性行動と日本社会*. 京都：ミネルヴァ書房.

国立社会保障・人口問題研究所.（2011）. 第 14 回出生動向基本調査：結婚と出産に関する全国調査　夫婦調査の結果概要. <http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.asp>（2015 年 1 月 26 日 19 時 12 分）

Lawrence, B. S. (1996). Organizational age norms: Why is it so hard to know one when you see one? *The Gerontologist*, ***36***, 209–220.

Lashbrook, J. (1996). Promotional timetables: An exploratory investigation of age norms for promotional expectations and their association with job well-being. *The Gerontologist*, ***36***, 189–198.

Lewis, C. E., & Lewis, M. A. (1984). Peer pressure and risk-taking behaviors in children. *American Journal of Public Health*, ***74***, 580–584.

松井　豊.（1990）. 青年の恋愛行動の構造. *心理学評論*, ***33***, 355–370.

松井　豊.（2000）. 恋愛段階の再検討. *日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集*, 92–93.

松井　豊.（2012）. 日本心理学会第 76 回大会 WS「異性交際をしない・できない若者へのアプローチ」指定討論.

Meier, A. M. (2007). Adolescent First Sex and Subsequent Mental Health. *American Journal of Sociology*, ***112***, 1811–1847.

望月葉子，中島史明，大根出充男.（1992）. 年齢規範の観点からみた青年の将来展望に関する研究：予期された標準的なライフサイクルと職業生活設計をめぐって. *発達心理学研究*, ***3***, 81–89.

内閣府政策統括官.（2011）. 平成 22 年度結婚・家族形成に関する調査報告書. <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/cyousa22/marriage_family/mokuji_pdf.html>（2017 年 7 月 25 日）

Neugarten, B. L., Moore, J. W., & Lowe, J. C. (1965). Age norms, age constraints, and adult socialization. *The American Journal of Sociology*, ***70***, 710–717.

日本性教育協会.（2007）. *「若者の性」白書*. 東京：小学館.

日本性教育協会.（2012）. *青少年の性行動　わが国の中学生・高校生・大学生に関する第 7 回調査報告*. 東京：日本性教育協会.

国立社会保障・人口問題研究所.（2017）. 2015 年社会保障・人口問題基本調査（結婚と出産に関する全国調査）現代日本の結婚と出産―第 15 回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書―. <http://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/shussho-index.html>（2017 年 7 月 25 日）.

大根田充男・望月葉子・中島史明.（2003）. 高校生の職業生活設計：10 年の変化. *宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要*, ***26***, 195–204.

Rosenthal, D. A., & Smith, A. M. (1997). Adolescent sexual timetables. *Journal of Youth and Adolescence*, ***26***, 619–636.

Settersten, R. A. (2003). Age structuring and the rhythm of the life course. In J. T. Mortimer, & M. J. Shanahan (Eds.), *Handbook of the life course* (pp. 81–98). New York: Kluwer Academic Pub.

Settersten, R. A., & Hagestad, G. O. (1996a). What's the latest? II. Cultural age deadlines for educational and work transitions. *The Gerontologist*, ***36***, 602–613.

Settersten, R. A., & Hagestad, G. O. (1996b). What's the latest? Cultural age deadlines for family transitions. *The Gerontologist*, ***36***, 178–188.

Thompson, E. (1982). Socialization for sexual and contraceptive behavior: moral absolutes versus relative consequences. *Youth & society*, ***14***, 103–128.

東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会.（2005）. *児童・生徒の性―東京都幼・小・中・高等学校の性意識・性行動に関する調査報告（2005 年調査）*. 東京：学校図書.

和田　実.（2004）. 性に対する態度および性行動の経年変化とそれらの規定因―3 回の調査データの比較―. *思春期学*, ***22(4)***, 481–494.

若尾良徳.（2004）. 恋愛経験ステレオタイプの検討―日本の若者にみられる恋愛普及幻想と恋愛ポジティブ幻想(7). *日本心理学会第 68 回大会発表論文集*, *109*.

若尾良徳.（2013）. 大学生における性交経験者・未経験者に対する人物特性イメージの検討―イメージされた性別による差異の検討―. *浜松学院大学研究論集*, ***9***, 37–48.

若尾良徳・天野陽一.（2007）. 大学生における初交年齢の意識―神奈川県の一私立大学を対象として―. *思春期学*, ***25(4)***, 455–462.

若尾良徳・天野陽一.（2012）. 性交経験者・未経験者に対するイメージが大学生の精神的健康に及ぼす影響―性別によるパターンの違いの検討―. *思春期学*, ***30(1)***, 155–168.

〈連絡先〉
著者名：若尾良徳
住　所：東京都世田谷区深沢 7-1-1
所　属：日本体育大学保育学研究室
E-mail アドレス：wakaoy@nittai.ac.jp